

知られざる郭沫若の諸事について(4)【サマリー】

齊藤孝治

中国では、西南地方の要地、成都と直轄地の重慶のことを「成渝地区」といいます。「成」が四川省の省都成都を指していることはすぐにわかりますが、聞きなれない「渝」となると首を傾げる人が多いと思います。

「渝」とは長江に注ぐ西南地区の重要な河川、嘉陵江が古くは「渝川」と言ったからです。

さらにその昔、重慶を中心とした一帯は、「巴子国」とも称していました。

「巴」も重慶の古称の一つですが、そのことを知っている日本人は極めて少ないのではないのでしょうか。

日本と明との勘合貿易時代、明からの日本への主な輸出品は、常に絹糸、絹布、絹織物など絹ものでした。

当時、足利幕府の役人や日本の貿易商は、前記の絹ものを「パーもの」と呼んでいました。

言うまでもなく「パー」は「巴子国」の「巴」から来たものです。

1876年(光緒2年、明治9年)、清はイギリスの圧力の前に芝罘(シーパー)条約を結び、長江に架かる重慶港を開港、それを見習った日本も1895年(光緒21年、明治28年)、日清戦争に勝利すると、4年後、重慶の南大門外に広さ466.830平方メートルという広大な土地を日本租界として手に入れました。

その面積は、東京ドーム約10個分という広さだったのです。

もっともそこは、市の中心から遠く離れた城外にあるというハンデを持ちながら日本の企業や個人の進出がそれなりにあり、絹ものはもとよりマッチ、製粉、醸造といった日用品から製鉄、船舶修理などの製造業に励み、成長を見せていました。

同時に重慶から日本への輸出も盛んで、絹ものをはじめ羊毛、羊革、白蠟、漆蠟、青麻、棕絲、猪鬃が主なものでした。

聞き慣れない猪鬃は、豚の鬣(たてがみ)のことで、堅くて弾力性に富んでいるためロープ、ブラシに適していたのです。

しかしながら重慶の人たちも租界や対日貿易には反対する人が多かったのです。

1931年(民国20年、昭和6年)9月18日、関東軍の精鋭分子が満州事変(9・18事変)を引き起こして以来、事あるたびに重慶の日本租界の回収と対日貿易の撤退の声が高まり、1937年(民国26年、昭和12年)7月7日、盧溝橋事件(7・7事変)が勃発すると、その願いが実現しました。

今、日本—重慶貿易は、清廉潔白を求める習近平体制の厳格な政策を受け、停滞気味にあり、両国経済界ではその回復を求める声が極めて顕著になっているようです。

日本や日本経済界は、「前車の轍」を踏まないよう心掛ける必要があるのではないのでしょうか。